2023 年 2 月 6 日

中小規模の漁港における空間価値に関する研究

—千葉県館山市富崎漁港（布良地区）がもつ「劇場性」に注目して—

建築学専攻　　MJ21058　坂田（さかた）　耕平（こうへい）

プロジェクトデザイン研究　　指導教員　山代　悟

00.研究について

0-1.背景

国土全体が海に囲まれる島国である日本には、2785 港（2022 年 4 月 1 日現在）の漁港が存在し、それらは水産業の拠点として、または国防のための避難港として建設され続けてきた。近年は漁業就業者数の減少、漁港機能の分散により、漁港施設とその用地の維持管理・更新費の増大が懸念され、地域の重要な拠点である漁港が、十分に利用されることがなくなる恐れがある。

0-2.目的

20 世紀初頭から始まった近代漁港建設。水産業の変化に伴い、十分に利用されることがなくなってしまった漁港空間を、今後の地域振興に活用する空間資源として捉え、漁港空間の価値を再定義し、今後の新たな漁港空間の活用を提案することを目的とする。

01.漁港の現状

1-1.漁港とは

漁港の整備は「漁港漁場法（旧漁港法）」に基づいて行われてきた。法律では「天然又は人工の漁業根拠地となる水域及び陸域並びに施設の総合体であって、法の規定により指定されたもの」と定義され、1950 年の漁港法制定以来、指定されてきている。さらに漁港はその利用の範囲等により、第 1 種から第 4 種までに区分される。

計:2785 港（令和４年４月１日現在）				
第 1 種漁港：2042 港	第 2 種漁港：525 港	第 3 種漁港：101 港	特定第 3 種漁港：13 港	第 4 種漁港：99 港
釜谷漁港（新潟県新潟市）	美保関漁港（島根県松江市）	安乗漁港（三重県志摩市）	焼津漁港（静岡県焼津市）	中村漁港（島根県隠岐郡隠岐の島町）

図 1 ：漁港の分類

1-2.漁業従事者と漁港の関係

最も漁獲量の多い銚子漁港と 5 種類のすべての漁港が存在する千葉県を対象として、地区単位での情報公開を始めた 2013 年と 2018 年の漁業センサスデータの比較から、漁港別の漁業経営体数の変化を調査した。49 か所の漁港のうち、8 ヶ所のみ漁業経営体数が増加、または変化がなく、ある程度の漁業経営体数が存在する漁港はすべて合併漁協によって管理され、生産拠点漁港や流通拠点漁港などの重要な漁港として位置付けられていた。漁獲量の減少や担い手の不足などの理由によって全体として漁業経営が厳しくなる中で、経営基盤を維持するための漁港の「選択と集中」が起こっている。

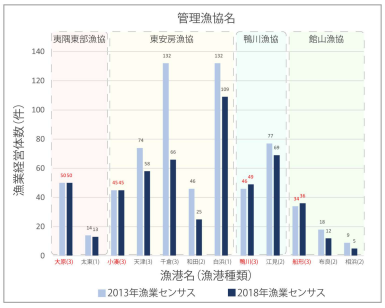

図 2 .千葉県内の合併漁協が運営する漁港別漁業経営体数の変遷（2013 年～2018 年）

02. 近代漁港の成り立ち

2-1. 漁港黎明期

明治後期に起こった動力漁船の導入によって、水産業が大きな発展を遂げた。これによって動力漁船の安全な係留、大量漁獲を保障する漁港の建設需要が高まっていったことが近代漁港建設のはじまりとされる。

2-2.漁港普及期

1950 年、漁港法が制定され,、公共事業としての漁港の整備が進み、1982 年に国連海洋法条約では、沿岸から 200 海里までの区域を排他的経済水域と定め、その国の許可なく外国船が漁をすることを禁止した。これを機に、これまで大きな漁獲量を得ていた遠洋漁業での発展に歯止めがかかり、徐々に沿岸漁業への回帰が図られていく。

2-3.漁港再編期

2002 年、漁港法が漁港漁場法に改正された。漁業生産量の減少、漁業の担い手の不足などから漁業地域の活力の低迷が起こる中、平成 31 年 4 月、水産庁によって、水域・公共空地、漁港施設の占用許可期間の拡大と、漁港施設用地に関する補助金返還の緩和措置が適用されるようになり、より民間主体が漁港を利活用しやすくなるような制度の変更が進んでいる。

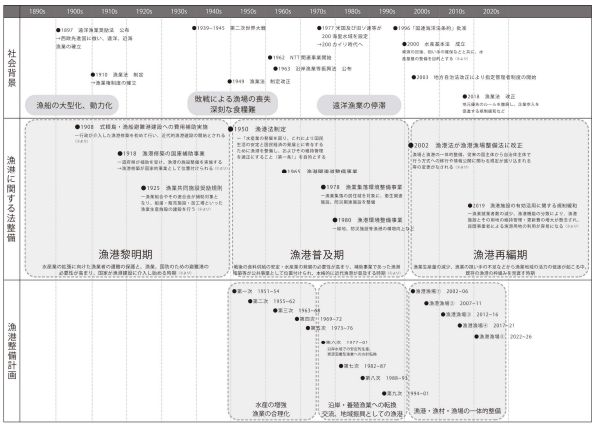

図 3.近代漁港成立過程に関する年表

03.漁港空間の価値～千葉県内第二種漁港を対象に～

3-1.漁港の基本構成

日本全国に存在する漁港は、岸壁、泊地、防波堤といった基本的な役割をもった構成とそれに伴う合理化された形状をもっている。陸地から伸びるように水面を囲む防波堤は内側の水面

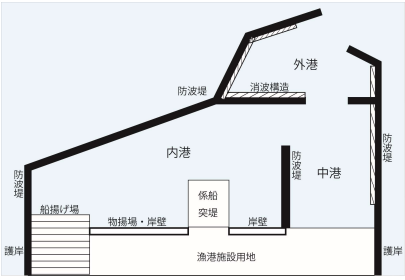

図 4.漁港の基本構成と防波堤のレイアウト

の静穏度を保つために、沖から沿岸に進むほどいくつかの分岐した提によって、大きな水面を分割している。これらの基本構成の下、それぞれの漁港の立地特性、規模、波の訪れる方向などの要因によって防波堤の形状や分割する水面の数にそれぞれの漁港の個性が現れる。

3-2.漁港空間の比較分析

3-2-1.分析概要

漁港空間が周辺に与える景観的な影響や、漁港と周辺の土地利用との関係性を明らかにし、特に地域資源としての価値があると考えられる漁港を抽出することを試みる。ここで漁港空間がもつ空間価値のひとつを「劇場性」と呼ぶこととし、個別の漁港の「劇場性」を評価する。「劇場性」を評価するにあたり、以下の５つの項目を指標とし、千葉県内の第二種漁港に分類される 16 港を比較分析する。

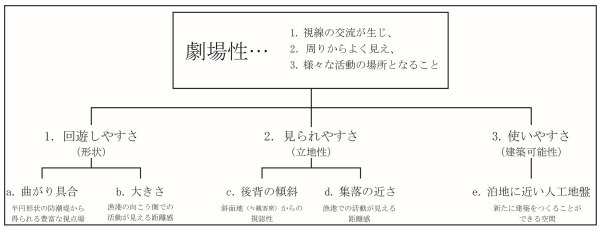

図 4.「劇場性」５つの指標

3-2-2.分析結果

それぞれの漁港の形状は、防波堤によって水面を分割している数と、防波堤と漁港に接する陸地の平面形状に注目すると、６個のパターンに類型化された。類型されたものの中でも、「斧型」、「くの字型」に分類される漁港は、外側の防波堤が内側を囲みながら、さらに内部の水面を細かな提によって 4~5 個に分割している、あるいは港に接する陸地が湾曲していることで豊富な視点場と、程よい距離に収まる水面を挟んだ対面する地面を多く獲得していた。近代以降、安全な船の係留、大量漁獲の保証などの理由によってつくられた漁港空間が、結果的に劇場性を帯びている。

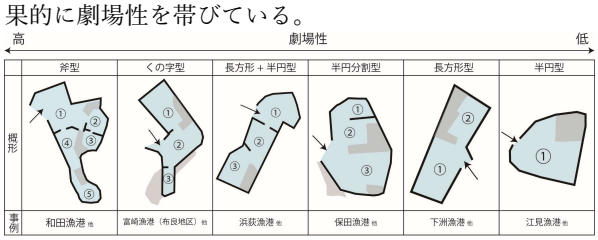

図 5.漁港形状類型化図

3-3.富崎漁港（布良地区）を対象とした調査

3-3-1.概要

前述した調査結果から、劇場性を帯びる漁港空間としてポテンシャルをもつ漁港の１つとして、富崎漁港（布良地区）を取り上げる。この漁港は漁業利用としては３軒の漁師に限られる一方で、休日には遠方から釣りをしに訪れる人々のための釣船が動く漁港である。

3-3-2.空間分析

文献調査から、日本における劇場の歴史において、街路空間が突然劇場として機能し、「道」が劇場性を帯びる場所だということが分かった。そこで布良漁港の水面を囲む漁港空間を１本の道と捉え、そこから観察される風景、空間要素を類型化した。

筆者の観察による 12 の風景の要素を、目の前の泊地や向こう側に広がる海など水面によって構成される要素と、建物や集落などの水面の景色以外で構成される要素の２つの軸をとり、それぞれの要素が近景に収まるのか、遠景に収まるのかによって４象限のマトリクス図によって分類した。

富崎漁港（布良地区）では、構築物と海の２つの要素の近景、遠景の関係がシークエンスの連続の中で反転し、スケールの異なる様々な構築物によって、観察者の視線の対象をも反転させている。湾曲した平面、様々な断面形状をもつ空間が偶発的な視線のすれ違いや、同じ場所の共有といった人々の関係を生み出している。

図 6.漁港空間を構成する風景を類型化したマトリクス図

04.富崎漁港（布良地区）を対象とした有効活用提案

富崎漁港（布良地区）を対象とし、有効活用提案を行う。港を囲む複数の場所を対象として、ある民間主体が行う開発と仮定し、地元の人が利用する日用品を売る店舗、釣り人のためのキッチンスペース、企業や個人事業主のためのワーケーション施設を点在的に配置し、漁港全体をめぐるような体験を創出する。それぞれの場所から見える風景を切り取るように壁をたて、それぞれの既存の断面形状に呼応するように屋根をかける建築的操作を行う。

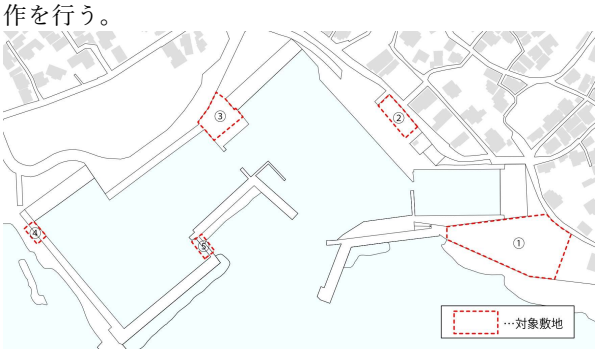

図 7.敷地図

05.終わりに

本研究を通して、海への視界を遮るものとして認識されることが多い防波堤は、富崎漁港（布良地区）においては、そのような防波堤が人々の関係をつくる形状をもっているという新たな視点を獲得した。

漁港に限らず、都市が縮退化するフェーズにおいては、もともとの意図によって作り出された空間を、他者が異なる意図に読み替えて転用し、都市を再編していく視点がより重要になっていくのではないだろうか。

参考文献

(1)川口毅,漁港工学概論,成山堂書店,2005

(2)地井昭夫「漁師はなぜ、海を向いて住むのか？」工作舎,2012 年

(3)篠原修,景観用語辞典増補改訂第二版 ,彰国社,2021

(4)本杉省三,劇場空間の源流,鹿島出版会,2015

(5)土井良浩(2003)漁港法成立前における漁港論の編成 —学術的論述の規定する漁港の定義・配置・空間構成—日本都市計画学会論文集